
バトン — 語り継ぐもの —

エリー・ドーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトン ― 語り継ぐもの ―

【Nコード】

N7161I

【作者名】

エリー・ドーラ

【あらすじ】

ひそかに語り継がれる、ある怪談話。何の変哲も無い物語は、不可解な死への扉を開く序章だった。今日もまた誰かが、どこかで語る。その心に深く暗い闇を秘めて。

序章 〵 十月三日 〵 (前書き)

人間の心に潜む闇の部分表現したいと思って書いた作品ですので時に残酷な描写があるかもしれません。その点、ご了承ください。

序章 〃 十月三日 〃

鈍い衝撃音が早朝のキャンパスに響き渡った。 誰かの悲鳴と叫び声が交差する。

ひと際大きな叫び声をあげながら、打ち捨てられた人形のように不自然な姿で倒れている人影に木島良一は駆け寄り、取り縋った。

「多恵子、多恵子っ！」

何度も名前を呼び、ゆつくりと血に染まり行く若い女の傍らでうずくまる。

「リヨウちゃん……、リヨウちゃん、痛い……」

朦朧としながらハッキリと聞き取れない弱々しい声で若い女が呻く。

「多恵子しつかりしろ！ 大丈夫だから、大丈夫だから」

「痛いよお、痛い。痛……」

若い女はそこまで言うのと、激しい痙攣を起しながらゴフツと血を吐き

「ごめ……、ごめん……ね。リヨ……」

と目を閉じた。木島は涙声で

「もついいから、何も言わなくていいから、だから生きてくれ！」

多恵子と呼んだ若い女に懇願するように振り絞った。

だが若い女の意識はすでになく、呼吸すらしていないようだった。

「多恵子死ぬな！ お願いだから」

木島の悲痛な叫びがキャンパスにこだまする。

まだ登校する者も少ない学内で騒ぎを聞きつけた学生たちが遠巻きに見つめる中、

木島は必死で若い女に呼びかけていた。

恋人の渋谷多恵子から木島良一が別れを告げられたのは、ほんの一週間前の事だった。

他に好きな人が出来たのだと打ち明けられた木島は、割り切れないながらも

多恵子の気持ちを汲んで何も言わずに別れた。

本当は言いたいことは山ほどあったのだ。多恵子が好きになった相手、多々良健介が、

どれほど女にだらしく残酷な男なのか……

実際、多々良健介という男の評判はろくなものではなかった。

あやしげなインターネットサイトに出入りし、不当な金を稼いでいるとも噂があった。

次から次へと女に手を出し、すぐに飽きてしまう。移り気な多々良に泣かされた女子学生は多かった。飽きた女にはどこまでも残酷になれる男だと、同じゼミの学生の間では評判だった。

その悪名高い多々良と渋谷多恵子が、どういうめぐり合わせで付き合うようになったのか

木島には知る由もなかったが、心から多恵子の事を心配し、一人の友人として

忠告したいとも思った。

しかし結局、多恵子に多々良の評判を教える事は出来なかった。生まれて初めて恋した女性である多恵子を木島は愛しすぎていたのだ。

不用意に多々良の評判を多恵子に告げて、陰口を叩く男だと軽蔑されたくはなかった。

今、多々良と居て多恵子が幸せなら身を引いたほうが男として潔いと木島は考えたのである。

だが自分の考えは、ただの自己満足だったと木島はすぐに思い知らされた。

木島と別れてから多恵子の痛々しい噂は、すぐに広まったのだ。

「渋谷という女が多々良にすぐに飽きられて捨てられた」

「多々良に甘い言葉で誘われて、すぐに体を許したらしいぜ」

「バージンは面倒臭いって本当なんだって、多々良が笑ってた」

「結局、利用されるだけ利用されて捨てられたオンナ」

「多々良が捨てた多恵子という女の全裸の写真がインターネットで晒されているらしい」

どの噂も木島にとっては、信じ難い耳を塞ぐものばかりだった。噂が本当なら

たとえ彼女に軽蔑されようと、未練がましい男と嘲笑われようと彼女から身を引くべきではなかった。あんなにもあつさりと別れるんじゃないかった。

木島は後悔の泥沼に身を浸していた。もがけばもがくほど、後悔の泥は木島に重たくへばり付いた。

そんな時に多恵子からメールが届いた。

『話を聞いて欲しいの』

一言だけ書かれていたメールに、木島は飛びつくように返信した。

再び多恵子から届いたメールには朝の7時に、文学部がある校舎の屋上に来て欲しいと

書かれてあった。

朝7時の大学構内は静寂に包まれ、まるで時間が止まっているかのように木島には思えた。

「何故、こんな朝早くから多恵子は僕をここに呼び出したのだろう」

木島は少しは不信感を抱いたものの、その不信感より多恵子に逢いたい気持ちが勝っていた。

彼女が話したいというのなら何でも黙って聞いていてやる。

もしも助けてくれというのなら、何が何でも救ってやる。

そんな気持ちで木島はいっぱいだった。

逸る気持ちを抑えて薄暗い校舎の階段を昇りつめ屋上の扉を開け彼

女の姿が見えた時、

木島は多恵子を抱きしめたい衝動に駆られた。

一人、佇む多恵子に向かって駆け寄ろうとした瞬間

「来ないで！」

多恵子が叫んだ。

そのあまりに悲痛な叫び声に、木島の体が固まる。

「多恵子……？」

弱々しく呼びかける木島に多恵子は顔を歪め首を振りながら

「リヨウちゃん、お願い。そのままそこにいて」

泣き声で言つと

「私、本当はリヨウちゃんにやさしくしてもらえる女じゃないから」

両手で顔を覆いながらしゃがみ込んだ。

「何を言っんだ。僕は君のためなら何だって出来るし、どんなことでも耐えられる。」

僕がやさしいというのなら、それは多恵子を本当に好きだから！」

多恵子に近づくことも出来ないまま、木島はその場で立ちすくんで大声をあげた。

「ごめんね、リヨウちゃん。私が馬鹿だった。リヨウちゃんに愛されてたのに……」

顔を隠したまま多恵子が呟く。

「いいんだ、もういいんだ。多恵子」

なだめるように言葉をかける木島に

「私、私、あいつに騙されて……、リヨウちゃんを裏切った罰なの」

「もういいんだよ、多恵子！」

木島が強い口調で叫ぶ。

「何があっても、どんな君でも僕が守るから」

その言葉に、多恵子が顔をあげ木島に一瞬やわらかく微笑みかけた。

「さあ、そこは寒いだろう？ こっちへ、こっちへおいで」
手を差し伸べて、木島が近づこうとした瞬間の出来事だった。

「ごめんね。ありがとう、リョウちゃん。最期に逢えて良かった

……」

多恵子が突然、屋上の柵を乗り越え身を投げた。

フワリと宙に浮いた多恵子の体が、ゆっくりとスローモーションの
ように落ちていく。

まるで命短い蝶がひらひらと頼りなく風に乗るように最愛の女性が
長い髪を風になびかせ

地面に吸い込まれていく様を木島は叫び声をあげながら目の当たりに
していた。

序章 〃 十月三日 〃 (後書き)

もともと、随分前に書いた短編小説ですが時間の流れとともにストーリーが膨らみ始め、新しく加筆中の作品です。

物語の核となるのは、人間の心に潜む闇が生む新たな闇。最後までお付き合いいただければ幸いです。

十二月十五日

この数ヶ月の間、太田雅人の周りで友人たちが相次いで原因不明の死を遂げていた。

病死とも事故死とも殺人とも言えない何とも不可解な死は、生き残った友人たちに

面白おかしく、時には怪談話ように取り沙汰され語られたが誰も真相は判らずじまいだった。

クリスマスソングが街中に流れ、年末に向けて誰もが浮き足立つ十二月。

突然、高校からの友人だった西口智弘から呼び出しが掛かった。

高校時代からお調子者とレッテルを貼られ、太田たちに好きなように使い走りに使われても、

西口はいつもヘラヘラと笑いながら、まるで金魚のフンのようにくつついていた。

だが、西口はその日は珍しく妙に深刻な暗い顔をして、一人、待ち合わせの喫茶店の

片隅のテーブルに座っていた。

「どうしたんだよ？女にでもフラレたか？」

笑いながら聞いてみたが西口は首を横に振るばかりで、なかなか口を開こうとはしない。

同じく高校から親交のある前川一磨と二人、西口と会うために出かけたのだが

気の短い前川が早速苛立った。

「おい西ちゃん、いい加減にしてくれよ。話がないならもう帰るぜ

？なあ、太田」

「わ、わかった！話すよ。話すから、頼むっ！」

太田と前川は顔を見合わせ短いため息をついて西口の前に座り直す

と蒼ざめた顔を

ピクピクと引きつらせながら西口がボソボソと話し始める。

「この何ヶ月かの間にさ、いろんな奴が死んだじゃん」

「あー、あの何だか原因不明の謎の死ってヤツか？」

前川が合の手を入れる。

「そう、それ。俺、本当は何で死んだかわかってるんだ」

「本当かよ？ おまえ、またギャグでも言うつもりじゃないだろうな」

笑いながら言う前川に、西口は食ってかかった。

「冗談やギャグなんかで言うわけないだろう！ こんな恐ろしい事」

「恐ろしい事？ へえ、何だよ。ヤクザに目をつけられたとか？」

「そんな簡単なもんじゃない！これは呪いなんだ！」

「のろい〜？」

太田と前川は声を揃えて言うのと、また顔を見合わせて笑った。

「はっははは！ おまえ、おもしれーな。今時、呪いかよ？」

「笑い事じゃないよ、本当に呪いなんだ。この呪いにかかったら逃れられないんだ！」

ガタガタと膝を震えさせ、西口はさすが様な目つきで太田と前川を見た。

「で？ その呪いって、亀はノロイとかってんじゃないだろうな」

鼻で笑う前川を抑えて

「まあまあ、カズマ。面白そうだから聞いてやろうぜ。西やんも聞いて欲しいんだろ？」

太田が言うと

「聞いて欲しいけど、だけど、やっぱり……」

と西口は言葉を濁した。

「はあ？ ここまで引つ張いと言いたくないだど？」

いきり立つ前川に

「ひとつだけ、言っておきたいんだけど」

西口がボソボソ答えた。

「何でも言えればいいだろう。おまえ聞いて欲しくて太田を呼んだんだろ」

「そう、まさかカズマまで付いてくるとは予想外だったけど」

「俺は邪魔者つか？ あー、ハイハイ！ すんませんでしたねっ」

吐き捨てるように言う前川に、太田は

「まあ、そう拗ねるなってカズマ」

苦笑しながら嗜め、続いて西口に

「西やんもさ、言いたい事あんならハッキリ言えよ。俺たちだってヒマじゃないんだぜ」

と釘を刺した。

「言うよ、言うけどさ……。ただひとつこれだけは最初に言うておく」

前置きをしてから、西口は深呼吸してこう告げた。

「今から話すことを聞いた者は、必ず呪いにかかる。これだけは承知しておいてくれ」

おどおどしながらも、どこかしら毅然とした面持ちで言う西口に

「ちょっと待てよ」

と水を向けたのは太田だった。

「必ず呪いにかかるって、西やんマジで言うてんの？ だとしたら、なんで俺たちに

聞かせようとすんだよ」

「だから無理強いはしないよ」

「はっ？ おまえバカ？ 今さら無理強いも何もあつたもんじゃねえ」

前川が口を挟んだ。

「まあちよつと落ち着けて」

太田が再び前川を諷める。

「太田やカズマに聞かせる話じゃないことはわかってる。呪いにか
かっちゃうんだもんな。」

ただ、もう俺は耐えられないんだ。この呪いのバトンを抱えてるこ
とに……」

ブルブルと震えながら押し殺した声で、西口が呟いた。

「呪いのバトン？」

「そう、呪いのバトンを俺は受け取っちゃったんだ。宮本から」

「み、宮本って、この前死んだあの宮本淳二か？」

太田と前川は顔を見合わせた。

「俺にこの呪いのバトンを渡して、1ヶ月もしないうちに宮本は死
んだんだ」

血の気が引いた白い顔で西口が言う。

「ま、マジかよっ！ おまえ、冗談じゃねえぞ！ 俺たちを殺す気
かよ」

口早に前川が捲くし立てる。太田はただ黙って西口を見つめてい
た。

「だから無理強いはしないって……」

弱々しく言う西口に太田は

「いや、面白そうじゃん。俺は聞きたいね、その呪いって奴を」

と言った。

「なっ！ 正気か？ 太田」

「ああ、正気も正気だよ。カズマ、おまえは帰っていいんだぜ」

「ばっかやろう！ おまえが聞くんなら俺だって聞いてやらあ！」

二人のやり取りを聞いて、西口は静かに聞いた。

「二人とも、本当に聞いてくれるんだね？」

言葉もなく太田と前川はこくりと頷いた。西口は目を閉じて深く
息を吐くと、

とつとつと語り始めた。

「この話は戦後間もない頃、K県のある村で村人全員が絶命したこ

とから始まるんだ」

一月一日

「え、おいっ。今、なんつった？」

携帯電話を持つ手の震えを押さえながら、太田雅人は聞き返した。新年を祝う酒のほろ酔いも吹き飛ぶほどの寒気が背中に走る。

電話の主の前川一磨は、泣き声で

「だからよお、西やんが死んだって」

「ふざけんなっ！ 正月早々縁起でもないこと言っなよ」

「ば、馬鹿野郎う……。ふざけてなんか言えるかよ、こんなこと」
声を震わせながら訴えていた。

西口智弘が自宅で無残な死体となって見つかったのは大晦日の昼頃だという。

今までの噂どおり、西口の死も病死とも事故死とも殺人とも言えない何とも不可解な死だった。

体中には無数の掻き傷が残り、窒息したような形跡もあったらしいがもつとも不可解なのは、掻き傷以外の目立った傷も殴打の後もないのに、

心臓がまるで握りつぶされたかのように損傷していることであつた。第一発見者である西口の母親は、遊びに来た西口の友人を部屋に案内して初めて息子の遺体を見た。

最初は強盗かと思い、警察に通報したが捜査の結果、強盗が侵入した形跡はどこにもなかったのである。

しかし、西口の部屋の異様さには捜査に踏み込んだ警官達も一瞬息を飲んだ。

部屋の壁という壁には恐らくは西口本人が残したのであろう、血のこびりついた爪あとが残されていた。

ごくりと生唾を飲み込んで、太田雅人は電話の向こうに問いかける。

「なあ、西やんが死んだのは例の呪いか・・・？」

そう言ってから、太田雅人の脳裏に西口が残した言葉が蘇る。それは西口智弘が死ぬ前の晩のことだった。

「太田、俺もういよいよダメみたいだ」

携帯電話の向こうから聞こえる西口の声は妙に冷静だった。

「どうしたんだよ、西やん。おまえ、大丈夫か」

心配する太田の言葉に西口は淡々と答える。

「声がさ、聞こえてくるんだよ」

「声？」

「ああ、女なのか子供なのかわかんねえ無数の声が笑うんだ。けたけたとな」

返す言葉もなく黙ったままの太田にかまわず西口が続ける。

「笑いながら、死ね、死ね、死ねってな……」

そう語りかける西口に

「なあ、西やん。今さらだけどよ、何で俺達に呪いのバトンなんか渡したんだ？」

冷静な声で太田は聞いた。

しばらくは押し黙っていた西口はやがて小さく笑うと、こう返した。

「何だ、まだわかんねえのか」

「どういうことだ？」

「俺はよ、おまえを殺してやりたいほど、ずっと憎んでたんだよ！

太田」

西口の言葉に、太田は驚きを隠せなかった。

まさか、殺したいと思うほど憎まれていたとは想像もしていなかったのだ。

しかし、恨まれる心当たりがまったくなかったのかと言えば嘘になった。

重い口を開いて、ようやく太田が返す。

「そんなに憎まれてるとは知らなかったよ。だけど、カズマを巻き

込んだのはいただけないな」

「ふん。そんなの知ったことか！ あの日くっついて来たあいつも悪いんだよ」

乾いた声で笑った西口の言葉を思い出しながら、太田は込み上げてくる寒さと底知れない恐怖に身震いした。

握り締めた携帯電話からは、前川一磨が心細い声で太田に呼びかけていた。

「お、太田あ……、俺達、どうすりゃいいんだ？ 俺、死にたくねえよ！」

三月五日

窓を叩く風の音が耳障りに感じる。相変わらず寝付けないうまま、太田雅人は何度も寝返りを打った。

あの西口が死んでからというもの、太田の脳裏には重苦しい呪文のように

何度も西口の言葉が蘇った。

「この話を聞いた者は必ず呪いにかかる」

最初のうちはただの脅しだろうと思った。

そもそも呪いなど、この科学が発達した現代においてはまったく馬鹿げている。

もしも何らかの予測不可能な出来事が起こったとしてもそれは呪いなどではなく、

ただの偶然であって不可解な出来事は『呪い』のせいになれば説明がつくと言うのは

都合の良い解釈なのだ太田は考えていた。

だから時折聞こえる幻聴のような無数の声も、自分の身の回りに感じる不可思議な気配も、

呪いなどという言葉に惑わされ知らずのうちに怯えている自分自身の深層心理が作り出した架空の出来事なのだと太田は何度も自分に言い聞かせていた。

いい加減、寝返りを打つのに疲れた太田は、もそりと体を起すとベッドから離れ

寝巻き代わりのＴシャツの上にジャンパーを羽織ると、あてもなく夜の町に出てみた。

妙に生温い夜風が吹きすさぶ。

誰も通ることのない静かな深夜の住宅街をとぼとぼと歩く太田の目の前を、ふと、一人の男が横切った。

薄暗がりの中、その顔は判別することが出来なかったが、どこことなく生気のない姿が太田の心に引っ掛かった。

重い足取りを引きずるように夜の闇を行く男の後を太田はこっそりとついて行く。

用心深く後をつける太田の気配に気付くこともなく歩き続ける男は、やがて道路に掛かる高架の真ん中まで来るとぴたりとその歩みを止めた。

しばらく何かを考え込むように宙を見上げ、口元でぶつぶつと呟くと男は車が行き交う真下の道路に顔を向け身を乗り出した。

じつと事の成り行きを見守っていた太田はたまらず

「おい！　ちよつと待て！」

大声で叫びながら男に駆け寄った。

太田の声に驚き振り向いた男の腕を力強く太田が掴む。

「な、何をするんですか！　離してください！　死なせてくれ！」

抵抗しながら腕を振りほどこうとする男の顔を見て

「おまえ、ひよつとしてうちの学校の奴か」

尋ねる太田の言葉に男はピクツと体を反応させる。

「そんなこと貴方には関係ないでしょう」

「いや、俺はたしかにおまえを見たことがある」

黙ったまま顔をそむけた男に、さらに太田は続けた。

「去年、うちの学校で飛び降り自殺をした女子学生がいた……。元カレってのが

一緒にいたらしいが、興味本位で俺はそいつを見に行っただぜ。おまえ、似てるよ」

そこまで太田が言うと、男は突然振り向いて

「ああ、そくだよ！　それが僕さ！！」

喉がちぎれんばかりに怒鳴った。

「そうさ、僕だ……。あの場にいながら僕は、僕は……」

体を震わせながら呟く男を、太田は黙ったまま見つめていた。

「僕はあの日から後悔ばかりだ。彼女を死なせてしまった哀しみに

耐えられない。

だが、彼女を死に追いやったアイツも許せない。なのに復讐することすら

出来ずにいる自分がもつと許せない!!」

「アイツ？」

「彼女を死ぬまで追いつめた酷い奴ですよ」

怒りに満ちた声で男が言う

「おまえ、そいつに復讐したいのか？」

と太田が聞いた途端のことだった。

突然、太田を包む空間がざわざわと騒ぐ。耳元で、女とも子供とも判断のつかない

無数の小さな声がクスクスと笑い声を上げる。

——こいつら、俺の命を待っているのか……？

その声はだんだんと大きくなり、太田は自分の命の火があとわずかで消えるかもしれないと

覚悟を決める時が近いことを悟るしかなかった。

やがて目の前の男が無言のまま、力強くこくりと頷くと太田は天を仰ぎ大きくため息をついた。

「いよいよ俺の番かもな……」

「え？」

聞き返した男に、苦笑いを見せながら

「ああ、俺は太田雅人って言っただ」

「え、ああ、はい……」

「おまえの名前は？」

太田の問いかけに男は拍子抜けした面持ちで答える。

「木島……良一です」

「なあ、木島。おまえ本当にそいつに復讐がしたいのか」

尋ねる太田に

「出来ることなら」

「たとえおまえの命と引き換えにしてもか」

木島はしばらく考えた後、こう返す。

「はい。あいつに復讐出来るなら！」

フフツツと太田が笑う。

「あの、太田さん……？」

不安げに声をかけた木島に、太田は

「おまえにそこまでの覚悟があるなら、いい方法を教えてやるぜ」
と切り出した。

「いい方法？」

「ああ！ 復讐したい奴に確実に一矢報いることが出来る方法さ。
ただ……」

一瞬、言葉を濁した太田に

「ただ？」 木島が聞き返す。

太田は、木島の顔を正面から見据えると

「おまえが信じる信じないは自由だ。ただ、今から話すことを聞いた者には必ず

呪いがかかる。それでもいいか」

と聞いた。

「の、呪い、ですか？」

「ああ、この話を人に話せば死んでしまうという呪いだよ」

「そんな馬鹿な」

呆れたように言う木島に、太田は小さく笑って

「やっぱ、そう思うよな」

と言ってから、あははつと渴いた声で笑った。

「冗談ですよ？ だってそれが本当なら太田さんが死んでしまう
じゃないですか」

少しムツとした声で木島が答えた。もつともなことを言う木島に、

うなづきながら、

ふっとため息を洩らすと太田は呟いた。

「俺もさ、少し疲れたんだよ。この呪いのバトンを抱えてることに」

「呪いのバトン？」

「ああ、このバトンを渡して俺のダチも死んでった」

あまりにも、あっけらかんと言う太田は

「俺は死ぬのなんて恐くねえが、いつか誰かに……」。

たとえば俺のダチにこの話を聞かすことになるかもしれないってこと
とが、一番恐いんだよ。

この呪いからは逃れられないからな」

「それで僕ならいいと？」

問い返す木島に

「おまえが命を賭けてでも復讐してやりたい奴がいるんなら、

おまえにこのバトンを渡してもいいかなと思っただけさ」

太田がきっぱりと言いつつ切った。

まだ信じられない気持ちの木島だったが

「その呪いの話、詳しく聞かせてください」

と自分でも意外なほど、あっさりと太田に願い出た。

何故、突然そう言ってしまったのか。木島にもよくはわからなかった。

あまりにも太田が淡々としているのが逆に真実味があったのだろう
か。

それともただの興味本位だったのか。

どう考えても説明のつかない自分の発した言葉を 木島は不思議に
思った。

だが、それはもう呪いの力に捕らわれていたからこそ発したものな
のかもしれない。

もしもこの呪いの話が嘘だったとしても、あの多々良を怯えさせる
ことは充分出来るかもしれない。

あんな男は死ぬまで多恵子の死を懺悔すればいいのだ。

懺悔して悔い抜いて、苦しみなから生きていけばいいのだ。

木島の心の中は、ただその気持ちで一杯だった。

「おまえ……、本当にいいのかよ？」

心配げに聞く太田に、無言のまま力強くこくりと頷く木島に太田もやがて決心を固めた。

目を閉じ、大きく深呼吸すると静かな声で淡々と切り出した。

「この話は戦後間もない頃、K県のある村で村人全員が絶命したことから始まるんだ……」

ある復讐の果て

ゼミ合宿の夜、退屈凌ぎに始めたお決まりの怪談話大会は木島良一の番になってガラリと雰囲気が変わった。

それまでの怪談話には、きゃあきゃあと騒いでいた女子学生達もどこことなく陰鬱で地味な木島に一瞬怯んだ表情になった。

木島の恋人だった渋谷多恵子が自殺した事件は、

その場に居た学生たちの誰もが覚えていてる。

元々、地味で目立たない存在だった木島だったが恋人の自殺以来、彼の暗い陰は深くなり

他者を拒絶するような近寄り難い雰囲気を纏っていた。

その木島が抑揚のない声で切り出した

「これから話すことは一年先輩の太田さんから聞いた話だ」という言葉に皆、静まり返った。

一年上の太田雅人は1ヶ月前に、謎の死を遂げたばかりで

事件とも事故ともあるいは病死ともわからず、今日に至っている。

当然、太田の死には何かと奇々怪々な噂が流れた。

ある者は何かの呪いにかかって死んだのだと言い、

ある者はただの病死かもしれないと言い、

ある者はあいつのことだから女に殺されたのだと言った。

しかし未だに真相は闇の中だっただけに、木島が出した

「太田」の名に、一同が凍りついた。

「今から話すことは、ある呪いの話だけど、ひとつだけ言っておく。

この話を聞いた者は必ず呪いにかかる。太田さんのようにね。

だから聞きたくない奴は今、ここから出た方がいい」

学生達から小さな声が漏れ、やがてそれは小波のように広がった。

木島は

「信じる信じないは、みんなの自由だ。ただ命の惜しい者は今すぐここから出て行ってくれ」と続けた。

しばらく、それぞれに顔を見合わせたり

ヒソヒソと言葉を交わしていた学生達だったが

木島の陰湿な表情に恐れをなしたのか、あるいは興がさめたのか一人、また一人と部屋を出て行き、最後に残ったのは

木島良一と多々良健介の二人だけだった。

「多々良君、君は出て行かなくてもいいの？」

木島が聞くと多々良は鼻息荒く

「へっ！ おまえの脅しなんか怖くねえんだよ。いいから早く話せよ」

と促した。

「そう……。僕にはその方が好都合だけだね」

木島はそう言うと、淡々と語り始めた。

「この話は戦後間もない頃、K県のある村で

村人全員が絶命したことから始まるんだ……」

木島の話はあつけないほど短く、わずか2、3分程度で終わった。

「えっ……。おい！ それで終わりかよ？」

「そう、これで終わり」

「村人の絶命原因を探りに行った科学者グループが死んで それで終わり！？」

怖くも何ともねえじゃんかよ」

「これで終わりだと言ったろう」

「はっ！ 笑わせるぜ木島！ さんざん脅しておいて みんな死んで終わりだと？」

これのどこが呪いなんだ。ふざけんじゃねえ！」

声を荒げる多々良に、木島は薄笑いを浮かべた。

「最初に言ったはずだよ、この話を聞いた者は必ず呪いにかかるってね」

「嘘つくんじゃない！ このオタク野郎が！」

「そんな呪いなんか、誰が信じるってんだ。この馬鹿」

続けざまに捲くし立てる多々良に、木島は声を殺してクククツと笑った。

「何がおかしい！！」

「ククク、君って本当に愚かだね。何が嘘なもんか」

「ああっ！？」多々良が顎をしゃくる。

「あの太田さんは、この呪いにかかって死んだんだよ。」

そしてこの僕も呪いにかかってる。今度は君の番なんだよ」

ヘラヘラと薄笑いを浮かべる木島の胸座を多々良が掴む。

「おまえも呪いにかかってんなら、何で太田みたいに死なないんだ？」

矛盾してるだろうが！」

「いいや、僕も死ぬんだよ。1ヶ月もしないうちに太田さんみたいだね」

「はっ？ おまえ、頭おかしいんじゃないの」

胸座を掴んでいた多々良の手を力一杯に振りほどくと

それまでの薄笑いを消して木島が言った。

「この呪いはね、誰かに話してしまった時から 死へのカウントダウンが始まるんだ」

「おまえ、まだそんなことを」

「僕はこの日が来る事を待ってたんだよ、多々良君。」

君が多恵子をひどい目に遭わせて死なせてしまったあの日からね」

あはははははっ！！

木島の笑い声が、真夜中の闇にいつまでも響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161i/>

ボタン — 語り継ぐもの —

2010年10月28日04時55分発行